

# 「風土」への接触量の変化が「地域への感情」に与える影響に関する研究\*

The study on effect of the contact level to regional environment on the emotional attachment to local area \*

鈴木春菜\*\*・藤井聡\*\*\*

By Haruna SUZUKI\*\*・Satoshi FUJII\*\*\*

## 1. はじめに

人々が居住する地域に対してどのように関与しているかは、その地域を対象にした交通計画・地域計画・防災計画などのあらゆる公共施策について考えるときに、決して無視できないものである。例えば、まちづくりや地域づくりの現場では、個人的なコストを顧みず多大な努力を地域のために重ねる個人の存在によって成功に導かれる可能性が存在し<sup>1,2)</sup>、地域の人々がそのような個人に「感謝」することができるような状況でそのような利他的な個人が発生しやすいことが知られている<sup>2)</sup>。このような地域の人に「感謝する」という関与以外にも、例えば「地域への愛着」を含めた地域への好意的な感情、あるいは地域へのコミットメントが、これらの地域への積極的な関与行動を促すこと可能性が指摘されている<sup>3)</sup>。ここで、地域へのコミットメントとは、佐野<sup>3)</sup>によれば、「地域愛着を動機とした、地域への責任ある関与」である。佐野は、若年成人層の内、地域に対する愛着を持っている人ほど、地域の子供への関わりが大きい可能性を指摘している。

さらに蔑ろにしてはならないことは、人々の地域への関与も、各種の土木施策が対象とする種々の物事・現象も共に、その地域の「風土」の一側面である<sup>4)</sup>という点である。和辻の考え方<sup>5)</sup>を踏襲するなら、「風土」とは「<自然>と<人々>における様々な関わり」の総体<sup>4)</sup>である。つまり、人間と風土とは、風土が有する人間の存在契機<sup>5)</sup>としての「風土性」を介して不可分であり、一体となっている。したがって、人間の営為の一種である各種土木施策もまた、この「たった一つの実態としての『風土』から不可分なもの<sup>4)</sup>」なのであり、それ故、これらの施策を行うことによって「風土」は変容せざるを得ないのである。土木計画者が評価しなければならない最も根幹的なものは費用や便益と呼ばれるものというよりはむしろ、まさにこの「風土の変容の形」に他ならないのである。そうであればこそ、各種土木施策の真の評価を目指すの

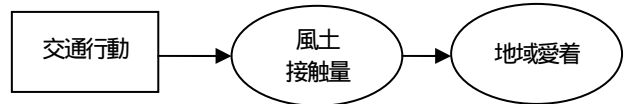


図1 交通行動が地域愛着に与える影響のモデル

なら、人々と地域との様々な形の「関わり」を無視してはならぬものなのだ我々は構えざるを得ないのである。

以上の議論を踏まえると、地域と人々との間の「関わり」の一形態たる、人々の地域への「愛着」や「関与」がどのように醸成されていくのか、また検討している施策等がこれらの醸成にどのように影響を及ぼすのかを、土木計画者は常に視野に収めなければならないという帰結が導かれることとなる。

萩原<sup>6,7)</sup>はこうした認識の下、利用交通手段による風土への接触量の違いに着目し、交通行動が地域愛着に与える影響について分析している。その結果「徒歩・自転車・バイク」といった短距離交通の利用割合が大きい人ほど風土との接触の度合い（以下、風土接触量）が大きく、逆に鉄道や自動車などの長距離交通の利用割合が大きい人ほど風土接触量が少ないことを示している。さらに、風土接触量が多い人ほど、地域愛着の度合いが高いという相関データを別途収集し、以上をまとめた図1に示す因果モデルを提案している。

ただし、上記の様な「相関データ」は、因果関係の存在する可能性を示唆するものの、その存在を立証するものとは言えない。この点に着目し、萩原<sup>7,8)</sup>は、2週間の間、自動車利用者に自動車利用の自粛を求めるといった形のフィールド実験を行い、利用交通手段の変化が風土接触量の変化を導くことを見だし、利用交通手段から風土接触量に至る因果関係の存在を示している。しかし、同じくその実験からは、地域愛着の変化は見いだせなかったことも同時に報告されている。この点について、萩原<sup>6,7)</sup>は、地域愛着が醸成されるためには数週間程度ではなく、一定の時間経過が必要であったために、地域愛着の変化が見られなかったのではないかと論じている。確かに、地域の風土に関わってからその地域

\*キーワード： 交通計画, 風土接触, 地域愛着,

\*\*学生員, 東京工業大学理工学研究所 (東京都目黒区大岡山2-12-1, TEL03-5734-2590, E-mail:hsuzuki@plan.cv.titech.ac.jp)

\*\*\*\*正員, 工博, 東京工業大学大学院理工学研究所 教授

に対して“慣れ親しんだものに深くひかれ、離れがたく感じる（大辞林）”感情である「愛着」が醸成されるまでには、ある程度の時間の経過が必要である可能性は十分に考えられるように思われる。この点を踏まえると、風土接触量が地域愛着に及ぼす影響の存在を実証的に示すためには、一定の時間変化を追跡可能な「パネルデータ」を活用することが得策である可能性が演繹されることとなる。

以上より、本研究では文献6)にて実施されたアンケート調査の被験者に対して追跡調査を行い、パネルデータを収集し、それをを用いて風土との関わりと地域愛着との関係を、改めて検証することとした。

## 2. 調査の概要

本研究では、個人の風土との接触量が変化すると、複その個人の居住地域への感情が複数の段階で変化することを検証するために、萩原ら<sup>6)</sup>が2004年11月に静岡県浜松市及び愛知県豊橋市で住民を対象に実施した調査の回答者を対象にしたアンケート調査を、約1年経過した2006年1月に再度実施し、パネルデータを得ることとした。

2004年の第1回調査は、郵送・ポスティング・訪問留置き各手法を併用して実施され<sup>6)</sup>、回答者が特定されている手法とそうでない手法があったため、回答者が特定されていない手法を用いたサンプルに関しては対象者全員に送付し、後で性別・年齢・住所・居住年数でマッチングを行った。第2回調査は、郵送のみで行われた。両調査の概要と調査項目と概要を表1に示す。また、検定に用いた心理尺度として、萩原ら<sup>7)</sup>と同様に「風土接触度」に加えて、地域への感情である「地域選好」「地域愛着」「地域持続願望」を活用することを前提として、それぞれの尺度に対応する表2に示した各項目に対する同意の程度という形で測定した。そして、各尺度値をそれらの測定値の平均という形で求めた。ここに「地域選好」は、表2に示した様に、個人的な嗜好の観点から当該地域を肯定的に評価する程度を意味するものである一方、「地域愛着」はそうした嗜好を越えて、当該地域に対して“慣れ親しんだものに深くひかれ、離れがたく感じる”（大辞林）程度を意味するものである（表2参照）。そして、地域持続願望とは、当該地域の永続を願う願望の程度を意味するものである。なお、各尺度の（両調査をプーリングした上で得られた）信頼性指標は表2に示した通り、十分な水準であった。

次に、第2回調査で得られた回答を第1回調査で得られたものとマッチングする作業を行った。その結果、回答者が一致したものは117であり、このデータを分析に用いた。その属性は表3に示す通りである。

表1 アンケート調査の概要

---

調査対象地:	静岡県浜松市・愛知県豊橋市
実施時期:	1回目:2004年11月,2回目:2006年1月
配布数:	1回目:1017世帯3034枚,2回目:415世帯・778枚
回収数:	1回目:261世帯・322名,2回目:161世帯・193名
回収率:	1回目:25.7%,2回目:38.8% (世帯ベース)
調査表配布方法:	1回目:訪問留置,ポスティング,郵送 2回目:郵送

---

調査項目:

(1) 風土との接触度

日常的に行っている交通の途中における空気・自然・地域の人々などの地域の風土との関わり具合について、「とても少ない」から「とても多い」までの5段階で回答を要請。

(2) 地域への意識

既往研究において作成された、地域（本研究では居住地の小中学校の学区（校区）程度の広さと定義）への感情に関する項目について、「全然、そう思わない」から「とても、そう思う」までの5段階で回答を要請。

(3) その他基礎項目

年齢・性別・居住地域の基礎項目等を調査。

---

表2 分析に使用した尺度の構成

---

風土接触度 (α=.84)	鳥や虫の泣き声を聞くことが多い 屋外の空気に触れることが多い 地域の人々とあいさつをする機会が多い 地域の人々と話をする機会が多い 道ばたに咲く花や土など、自然のおいをかぐことが多い
地域選好 (α=.89)	地域は住みやすいと思う 地域にお気に入りの場所がある 地域を歩くのは気持ちよい 地域の雰囲気や土地柄が気に入っている 地域が好きだ 地域ではリラックスできる
地域愛着 (α=.83)	地域は大切だと思う 地域に愛着を感じている 地域に自分の居場所がある気がする 地域は自分のまちだという感じがする 地域にずっと住み続けたい
地域持続願望 (α=.91)	地域にいつまでも変わって欲しくないものがある 地域になくなってしまうと悲しいものがある

---

表3 共通回答者の属性

サンプル数：94世帯 117名
性別：男性60名 女性56名 不明1名
年齢*：平均56.8歳 (SD14.5歳, 最高90歳, 最低26歳)
居住年数*：平均28.2年 (SD20.5年, 最高81年, 最低1年)
居住地：浜松市 60名 豊橋市 56名 不明 1名
*いずれも2回目の調査の回答値

表4 態度変化の基本統計量

	n	M	(SD)	min	max
地域愛着変化	110	0.133	0.623	-2.0	2.0
地域持続願望変化	110	0.223	1.12	-3.5	4.0
地域選好変化	110	0.230	0.618	-1.8	2.3
風土接触量変化	100	-0.152	0.974	-3.2	2.2

表5 地域への感情の変化と風土との接触量の変化の相関係数 (r=相関係数, p=rのp値, n=サンプル数)

		風土接触量変化	地域愛着変化	地域持続願望変化	地域選好変化
風土接触量変化	r	-	-	-	-
	p	-	-	-	-
	n	-	-	-	-
地域愛着変化	r	.019	-	-	-
	p	.857	-	-	-
	n	94	-	-	-
地域持続願望変化	r	.009	.304*	-	-
	p	.930	.001	-	-
	n	96	108	-	-
地域選好変化	r	.179*	.507*	.234*	-
	p	.082	<.001	.015	-
	n	95	106	107	-

\* p < .100

3. 分析結果

第1回の調査と第2回調査で連続した回答が確認できた17人のデータを分析し、1年2ヵ月間の間に、各指標がそれぞれどれだけ変化したかを求めた。その結果を表4に示す。さらに、表5に各尺度の“変化量”の間の相関を示す。表5に着目すると、風土との接触量の変化が、地域選好の変化と相関している傾向が示された一方、地域選好や地域持続願望の変化との間には有意な相関が確認できなかった。これはすなわち、風土への接触量が大きくなると地域選好度が有意に高くなるものの、地域選好や地域持続願望は有意には変化しなかったことを意味している。

この結果は、次のような可能性を示唆するものである。すなわち、風土接触量の変化は、今回のパネル分析の調査時点間の時間である1年強程度の時間経過でも「地域選好」の変化を導きうるものの、地域愛着や地域持続願望の変化を導きうるには1年強程度の時間では不十分であった、という可能性である。言い換えるなら地域に対する愛着やその地域の永続を願う気持ちは、1年程度ではなく、より長い時間を経て育まれるのではないか、という可能性が考えられる。

ただし、表5より、地域選好の変化は、地域愛着や地域持続願望の変化との間に有意な相関があることもまた示されている。これは、比較的短期的に変化する地域選好が、より長期的に変化するであろう地域愛着や地域持

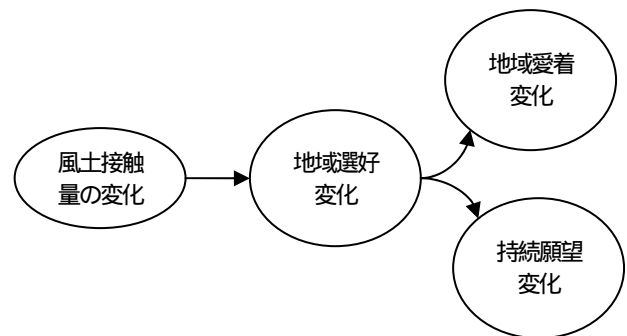


図2 風土との接触量の変化と地域への感情の変化量の間  
の関係についての仮説

表6 モデルの推定結果

	標準化係数	t値
風土接触量変化 地域選好変化	0.12	2.02*
地域選好変化 地域愛着変化	0.50	6.06**
地域選好変化 地域持続願望変化	0.42	2.55*

$\chi^2 = 0.885$	$p = 0.642$	$d.f = 2$
NFI	0.982	
CFI	1.000	
RMSEA	0.000	
サンプル数	116	

\* p < .100 \*\* p < .050

続願望に影響を及ぼす可能性を示唆するものである。

これらの分析結果を踏まえると、図2のような各資料の変化間の関係性が仮説的に想定されうることとなる。そこで本研究ではこの関係を検証するために、共分散構造分析を行った。なお、モデル推定にあたっては、変化のための時間がより長期的であると想定される地域愛着と地域持続願望の両者については、未観測の共通要因が存在するものと想定した。その結果、表6に示した通り、仮説で示した関係が全て有意となり、モデルの適合度も十分な水準に達した。

この様に、本研究のデータは、図2のモデルの妥当性を統計的に支持するものであった。ここで、この図2のモデルがもしも真であるとすると、表5に示された相関データが直接的に含意している、「風土接触量から地域選好に至る因果関係」の存在に加えて、次のような因果関係が存在する可能性が考えられることとなる。すなわち、風土接触量が、地域選好に影響を及ぼす事を通じて、間接的に、地域愛着、地域持続願望に影響を及ぼしている、という可能性である。

#### 4. おわりに

本研究では、一個人の時間の変化に伴う風土との接触量の変化が地域への感情に与える影響について、2004年と2006年に浜松市と豊橋市で実施された調査をもとに分析した。その結果、風土との接触が多くなると、地域への選好が高まることが統計的に示された。この結果は、萩原<sup>7)</sup>の実験では明らかにされなかった、風土接触量から地域への感情に至る因果関係の存在を支持するものであると解釈できる。同時に、地域愛着や地域持続性願望については風土接触量からの直接的な因果的影響を裏付けるデータは得られなかった。ただし、構造方程式を用いた仮説検定から、風土接触量の増加は、地域への選好を高めることを通じて、間接的に、地域への愛着や地域の持続願望などが強化する可能性が示唆された。

これらの結果は、1) 人々が地域風土と継続的に接触することを通じて、あるいはより厳密には、人々が地域風土と「一体」となる機会を通じて、地域選好が比較的短期間に醸成される一方で、2) 地域愛着や地域持続性願望などは短期的には醸成されがたいということ、3) しかし、長期的には、醸成されうることが存在するということを、それぞれ暗示するものとも解釈できよう。

なお、今回の実験では、1年間の変化において人々の地域への感情の変化を分析したが、交通施策を初めとした、地域で実施される様々な施策はさらに長期間を費やして実施されるものが多く、今回の実験で確認された変化よりもさらに広範な変化を促す可能性が大きいと推定され

る。また、冒頭で述べた通り、このような地域への感情は、地域への責任を持った関与であるコミットメントや実際の関与行動の動機となるものである。このため、人々の移動手段の変化を意図的であれ予想外であれ要請あるいは促進し、風土との接触量を変化させる交通施策等の実施は、人々の地域に対する感情の変化を経由して人々と地域との関係性を変化させる可能性があるといえる。このような交通施策を実施する際は、住民の地域に対する姿勢と行動にどのように影響するかを十分に検討する必要があるといえるだろう。

また、風土へ関わるのはもちろん移動中だけでなく、日常の消費活動、近隣世帯との関係、余暇の過ごし方から職業や居住地の選択まで、ありとあらゆる活動において我々は風土と関わっている。本研究では風土との物理的な接触に焦点をあてることによって交通行動の変化が地域への感情に影響を与えることを示したが、土木計画によってその他の活動が変化するのであれば、今後それらの活動の変化が住民の感情や関与を通じて風土に与える影響を、検討しなければならないであろう。

#### 参考文献

- 1) 藤井聡：社会的ジレンマの処方箋，ナカニシヤ出版，2003
- 2) 松山公紀：「まちづくり問題」と利他的行動の発生に関する理論的実証的研究，東京工業大学大学院修士論文，2005
- 3) 佐野茂，地域への愛着と子どもへの関わりに関する一考察，JGSS研究論文集[4]，2005
- 4) 藤井聡：風土に関する土木工学的考察 - 近代保守思想に基づく和土「風土：人間学的考察」の実践的批評 - ，土木学会論文集（印刷中）
- 5) 和土哲郎：風土：人間学的考察，岩波文庫，1948
- 6) 萩原剛，藤井聡：交通行動が地域愛着に与える影響に関する分析，土木計画学研究・講演集，2005
- 7) 萩原剛，自動車利用が地域愛着に与える影響に関する研究，東京工業大学大学院修士論文，2005
- 8) 萩原剛，太田裕之，藤井聡：アンケート調査回収率に関する実験研究：MM参加率の効果的向上方策の検討，土木計画学研究・講演集，2005